

## 令和2年度(2020)アサンブション国際小学校 学校評価報告書

### 1. めざす学校像

教育目標:「心身ともに、すこやかで愛に生きる子

～進んで学ぶ子、強く生きる子、神と人を愛する子～

#### 1. 進んで学ぶ子

- (1) 基礎的基本的学力を身につける
- (2) 自分で考え判断する
- (3) 自分の考えを表現し、分かち合う

#### 2. 強く生きる子

- (1) 基本的生活習慣を身につける
- (2) 強い心と体をつくる
- (3) 責任を持ち、自主的に行動する

#### 3. 神と人を愛する子

- (1) 自分の良さや人の良さを認める
- (2) 思いやりを持ち、友だちを大切にする
- (3) 感謝の気持ちをもって喜んで働く
- (4) 自然を大切にする

### 2. 2020事業計画

#### 【理念】

学院のモットー「誠実 隣人愛 喜び」に基づき、『世界の平和に貢献する人の育成』を目指す

～2022年度に全学年が新体制になるため、「アサンブション 21 世紀型教育」の充実と定着を進める

#### 1. 重点課題

- (1) 心を育てる教育の実践
- (2) 特色あるカリキュラムの実施
- (3) 児童の基礎学力定着に向けての取り組み
- (4) 教員の授業力向上に向けての取り組み
- (5) 中高との連携強化

#### 2. 具体的な取り組み

- (1) 心を育てる教育の実践
  - ① 宗教教育を充実させる。
  - ② 奉仕活動の意義を持たせ、人とのつながりや役に立つ喜びを感じさせる。
- (2) 特色あるカリキュラムの実施
  - ① 本校の特色の一つである英語教育をさらに発展させる。
  - ② ICT を利用した授業づくりを検討し、校内に ICT の活用を普及させる。
  - ③ エネスコスクールとしての使命を自覚し、校内外に取り組みの輪を広げる。
- (3) 児童の基礎学力定着に向けての取り組み
  - ① 「読み・書き・計算」の領域において、達成目標となる取り組みを設定し、実施する。
- (4) 教員の授業力向上に向けての取り組み
  - ① 授業研究会を計画的に実施し、全教員の授業力向上を目指す。
  - ② 外部講師による研修会を計画し、教員としての資質を高める。
- (5) 中高との連携強化
  - ① 併設中学校へ進学する児童を増やす。

保護者アンケート

【教育理念について】

例年は、新年度当初の入学式や保護者会などで、教育理念・学院モットーについて、保護者・児童に伝える機会があったが、2020年度は、前年度末から続く緊急事態宣言による休校に伴い、機会を設定することができなかった。しかし、教育理念の浸透は肯定が7割を超えており、制限の多い教育活動の中でも、児童の体験を、理念とつなげて発信することができた。ただ、ユネスコスクールの取り組みや、学院での奉仕活動(チャリティー・デー)については、感染対策が難しいため中止となり昨年度よりもやや低い評価に留まった。

【学習面について】

長期にわたる休校期間に動画配信(オンライン授業等)を継続し、学びを止めない取り組みを行ったことは一定の評価を得ている。新学習指導要領初年度として、「主体的・対話的な深い学び」の取り組みは、基礎学力の定着と共に、肯定が約7割となっており、本校の特色であるPBL(課題解決型授業)の先行導入が浸透していると思われる。

ICT教育については、コロナ禍において文房具の一つとして2年生以上に一人一台の導入を始めた。運用に関する不安の意見もあり、肯定は約半数となっているが、学校一括管理や授業での双方向利用など、今後の活用に期待をされている。

英語教育については、4年目となるコース体制や、イマージョン教育について肯定が6割となりそれぞれの特色を打ち出すことができているが、モジュールタイムの導入など、新規事業については、参観などの機会が設定できなかつたため、内容の発信を求める意見があった。低学年から、英語に教育に対する期待感は高くなっている。

【生活面について】

挨拶や言葉使いなど、生活面については、肯定が約7割となっており、学級活動・行事についても、コロナ禍の制限がありながら一定の評価を得ている。課外のアフタースクールについては、7割が肯定と評価し、保護者のニーズの高さを感じる。

【情報発信について】

教育活動の発信として、学校だより、学年・学級通信は、7割以上の高評価となっており、来校できない状況を補うツールとしての役割を果たしている。一方で、他学年との交流の制限により、併設校を身近に感じる行事などが中止となり、情報発信が不足気味であったため、否定評価が上回った。

教員アンケート

2020年度は、前年度末から続く緊急事態宣言による休校により、異例の新年度スタートとなった。予測不可能な状況下に、何よりも児童の学びを止めない取り組みを続けた結果が見られる評価となっている。

【学習面について】

特筆すべきは、「児童の基礎学力定着」「授業内における主体的活動」「タブレットの活用」について、7割~8割が肯定としており、限られた授業時間の中で、学習を意欲的にすすめてきたと評価している。一方で、制限のあるグループ活動のため、新規導入のモジュールタイムは、積極的な取り組みまでは至っておらず、英語4技能をバランスよく伸ばす点についても活動方法などの工夫が必要と考えられる。

ICT教育については、教員研修を経て、授業での双方向利用など教育的効果は6割が肯定と感じている。今後は、一人ひとりの学習スピードに合わせたAI教材の導入について6割が肯定とし、さらなる活用を期待をしている。

英語教育については、4年目となるコース体制や、イマージョン教育について肯定が6割となり、それぞれの特色を打ち出すことができている。コース体制が学年進行のため、特にイマージョンの取り組みが、一部に留まらず教職員の共通理解のもと完成形を目指すことが重要である。また、小中高12年間を見通し、連携した教育活動に向け教員間の交流が望まれる。

コロナ禍においては、コース毎の授業研修・新任研修などが設定しにくい状況であったが、今後、取り組みを共有しながら、授業力を向上させる研修の機会を定期的に設定することが望まれ、チームで授業や学級経営に取り組み体制作りが必要とされている。

【生活面について】

保護者アンケート同様、挨拶や言葉使いなど、生活面については、肯定が7割以上となっている。行事についても、制限の中、工夫を凝らし児童・保護者に感動を与えたとする肯定が6割を超えている。一方で、例年行ってきた奉仕活動など学院・保護者と共に行う行事が中止となり、教育理念やモットーの浸透について「どちらでもない」が約半数となった。

【情報発信について】

休校期間中より、情報発信のツールとして学習ポータルサイトを通じての発信が多くなってきているが、肯定は4割弱に留まっている。今後、内部満足度を高めるツールとしての利用を検討する余地があると考えられる。

また、保護者アンケート同様、併設校との交流は、教員間でも希薄となり、内部進学に向けた取り組みも否定が半数以上となった。

分析

保護者アンケートの結果から、低学年のイングリッシュコースを中心に、英語の取り組みに関して強い要望があることが分かった。また、児童間トラブルや生活指導を行う際には、担任のみに対応を任せるのではなく、担任外の教員のサポートを希望されている意見も見られた。一方で、コロナ禍におけるオンライン授業など、スピーディーな対応に対して高評価をいただいた。教員アンケートの結果からは、教員間における統一した約束事が必要だという意見があった。近年、教員の入れ替わりが目立っていただけに、統一した確認事項の徹底ができていない現状が浮き彫りになった。また、保護者・教員共に、幼・小・中・高の連携がより一層強くなることを望まれている。行事等、目に見える形で早急に取り組んでいく必要がある。

3. 本年度の取組内容及び自己評価

今年度の重点目標 (Plan)	具体的な取組計画・内容 (Do)	評価指標 (Check)	自己評価 (Action)
(1) 心を育てる教育の実践	①宗教教育を充実させる。	全校礼拝、各種宗教行事等において、神さまとの対話を通して心身共に健やかに成長させる。 (判定:○、△、×)	【結果】△ 指導できる人材が不足している。クラス数が増えてきているので、シスターにかかる負担がかなり大きくなっている。
	②奉仕活動の意義を持たせ、人とのつながりや役に立つ喜びを感じさせる	年間で計画されている奉仕活動に対して、事前に連絡や指導を行い、自発的に参加できるようにする。 (判定:○、△、×)。	【結果】○ コロナ禍において制限はあったが、節食ランチによる募金活動、お米一握り運動、難民への服のプロジェクトなど、クラス・学年での取り組みを行うことができた。
(2) 特色あるカリキュラムの実施	①本校の特色の一つである英語教育をさらに発展させる。	イングリッシュコースの達成目標を明確にし、12年一貫体制の展望を持った内容の検証を行う。 (判定:○、△、×)	【結果】△ イングリッシュコースの達成目標を設定し取り組みを進めている。2022年度に全学年のコース体制が確立するため、進学先となる併設校との交流機会を増やすことが課題となる。次年度に向け、相互の教科担当や施設利用の準備ができた。
		イマージョン授業の授業研を年間で複数回行い、授業の検証を進める。 (判定:○、△、×)	【結果】○ 2年算数、4年理科のイマージョンの授業研を実施できた。イマージョンの授業の在り方について検討する時間が持てたことはよかった。
	②ICTを利用した授業づくりを検討し、校内にICTの活用を普及させる。	情報担当の教員を中心に、ICTを活用しやすい環境を整えたり、実践を共有できるような研修を計画したりする。 (判定:○、△、×)	【結果】○ コロナ対応により、2年以上の児童に個人用iPadを購入してもらったこともあり、急激にICTの普及率が上がった。実践報告の場も、数は少ないものを持つことができた。
	③ユネスコスクールとしての使命を自覚し、校内外に取り組みの輪を広げる。	ユネスコクラブを新設し、クラブでの活動を中心にして、学校全体へ取り組みを広げる。 (判定:○、△、×)	【結果】△ 2020年度からユネスコクラブを新設した。しかし、社会状況により校外活動は中止となった。校内では古紙のリサイクル活動など、全学年にアプローチは行えた。
(3) 児童の基礎学力定着に向けての取り組み	①「読み・書き・計算」の領域において、達成目標となる取り組みを設定し、実施する。	イングリッシュコースを含めて、既存の「読み・書き・計算」の取り組みを見直し、その効果を検証する。 (判定:○、△、×)	【結果】△ 「読み・書き・計算」の領域において、達成目標となる取り組みを設定し、実施した。ただ、全体的に取り組み後の成果の検証が必要。また、実施に対してかける時間や労力・費用に対して、期待するような成果が得られないものがあるので、今後も検証を継続する。
		学習における個別最適化を図るための方法について検討する。 (判定:○、△、×)	【結果】× 業者とAI教材の導入について検討を行ったが、費用面で折り合いがつかず導入には至らなかった。

(4) 教員の授業力向上に向けた取り組み	①授業研究会を計画的に実施し、全教員の授業力向上を目指す。	学期に一回、国・算の授業研究会を実施する。また、公開授業も随時行い、教員の授業力向上に向けた研修を進める。 (判定:○、△、×)	【結果】× コロナによる臨時休校もあり、カリキュラムの大幅な変更があった。その影響もあり、予定した回数の授業研を実施することが難しかった。
		初任者研修を計画的に実施して、初任者に本校に必要な授業力を身に付けさせる。 (判定:○、△、×)	【結果】△ 初任者対象の授業研は実施できたが、日々の研修会を計画通りに実施できなかった。研修担当を一人で受け持つのは負担が大きいため、二人以上の配置が必要だと感じた。
	②外部講師による研修会を計画し、教員としての資質を高める。	PBL の共通理解を深める研修を実施する。 (判定:○、△、×)	【結果】○ 外部講師との ZOOM 研修を月一回程度開催した。少人数のグループに分かれて定期的に行えたため、発言しやすい雰囲気も作れ理解も深められた。
		外部講師を招いての授業リサーチを、学期に一度は全員に対して行い、問題点を洗い出せる研修の場を設ける。 (判定:○、△、×)	【結果】× コロナ禍により、予定していたような外部講師を学校に招いての授業リサーチは実施できなかった。
(5) 中高との連携強化	①併設中学校へ進学する児童を増やす。	中学校の授業体験を実施して、児童へ中学校進学へのイメージを明確に持たせる。 (判定:○、△、×)	【結果】○ 9月に、中学校数学科教諭にお越しいただき、6年向け体験授業(数学)を実施した。
		高学年保護者に向け、イマージョン授業を含めた中学校参観を実施し、中学校進学への意識を高める。 (判定:○、△、×)	【結果】△ コロナ禍の影響で、中学校の参観は実施に至らず。3学期の学年懇談の際に、4・5年生児童と保護者に向けて、中高管理職による進学セミナーを実施した。